



証言1

# 遺骨を胸に泣きながら校門去る 家族の姿は忘れられない

## —— 駅から被爆者を運ぶ

山本 智洋さん (木戸町)

**夏休みに召集**

昭和20年8月9日、当時私は山内西国民学校高等科1年生(現在の中学校1年生)でした。ちょうど夏休みでしたが、学校から「13時まで登校せよ」と連絡が入り、登校しました。登校したのは高等科1・2年生全員でした。グラウンドに集合した私たちに校長先生は「8月6日に、広島駅付近に小さな爆弾が落とされた。多くの負傷者がでて、広島病院だけでは収容できないので、この学校の一部が仮の病院になることになった。そこで今日の臨時列車で、負傷された兵隊さんが300人くらい運ばれて来るので、諸君は、担架で駅から学校まで運んでもらうことになった。負傷しておられるので注意すること、水を欲しがられても絶対与えてはいけません」と話しました。

**まるで生き地獄**

その時の異臭と、兵隊さんが重かったことを覚えています。こんなひどい目にあつたのに、小さな爆弾かと思議に思いました。当時の学校の先生は、士気が下がってはいけなさと、大変な被害を受けても「損害軽微」と言つて、真実を教えてくれませんでした。

自力で歩ける兵隊さんは、10メートルも歩くと前から順番に道に座り込まれ、その度に、軍刀を手にした将校さんが「立て」と大声で命令すると、スーッと立ち、手を胸の前まで上げ、だりとして歩く姿は、正に幽霊のようでした。

なぜあんなに厳しくされるのか、休ませてあげたらよいのに、と思ひました。

6人1組で私たちの班は、4人の兵隊さんを運びました。その中の一人は途中で「生徒さん学校はまだか」と何回も小さな声で聞かれましたが、学校にいたときには亡くなられていました。あの時の声が耳について寝つかれない日が何日か続きました。水をひびく欲しがられる兵隊さんもありました。男女の区別がつかぬほどに焼けただれだ2・3人が私たちに「ありがとう」と声をかけられ、その声

で、女性だと分かりました。ヤケドで膨れ上がった体に、ポロポロになった衣服がついているだけです。それはまるで生き地獄を見るようでした。

その後、私たちは夏休み中でしたが、交代で登校して死体の運搬などの仕事に当たりました。学校の裏山に穴を掘って死体を焼かれました。2学期が始まり9月下旬頃まで、その焼き場で死体を焼く煙が絶えませんでした。今日も、今日もというように、遺骨を胸に泣きながら校門を去る家族の痛ましい姿は、今はつきり記憶にあります。

2度とこうした悲惨な戦争をしてはならない、平和を守らなければいけないと、教職員時代は毎年子どもたちに語り継いできました。



原爆の絵 (広島平和記念資料館提供)



被害者の会の役員 (右から加藤照明さん、土井昭二さん、山本智洋さん、福山権二さん)

**山内で被爆者を収容**

(被爆体験記「葛城」から抜粋)

広島市に原爆が投下されてから3日後の8月9日、広島陸軍病院から「本日15時頃の列車で被爆者を輸送するので、その受け入れ準備を完了しておくように」と緊急連絡が、当時の山内西村役場にありました。さつそく役場が中心となつて、山内西国民学校を病棟にし、山内地区の国防婦人会、大政翼賛会、翼賛壮年団の協力によつて受け入れ体制を整えました。

被爆者を乗せた列車は山

内駅に到着し、274人の被爆者が下車しました。これらの被爆者は、広島市内で被爆後、徒歩で避難し芸備線沿いの戸坂小学校に収容された人たちでした。広島近隣の学校施設などに収容しきれない人数になり、陸軍病院の判断で県北部に輸送されたのです。

山内西国民学校の臨時病棟は、現在の山内小学校プールの位置にありました。2階建て校舎で1階に重症者を、2階に軽症者を収容しました。

動員された山内地区国防婦人会の人は、炊事、洗濯をはじめ、悪臭がただよう病棟内で、排便の始末、傷の手当て、食事の世話など、献身的な奉仕活動を毎日繰り返しました。

すさまじい被害者の現実の前に、地域住民からは、農産物や高価な客人用寝具が惜しげもなく提供されました。また、見舞いに来た家族の宿泊を受け入れ、看病する家族を支えました。毎日、5人、8人と無念の最期を遂げられた方々は

88人へのほり、山内西国民学校裏の葛城山麓の臨時火葬場で火葬されました。この病棟は、開設後、53日目の9月30日に閉鎖しました。

**翌年から慰霊行事**

あまりにも痛ましい悲惨な被爆者の最期に接し、献身的な看護に全力をあげた山内地区の婦人会の皆さんは、地域住民の協力を仰いで、翌年からお盆には毎年欠かすことなく被爆者の終焉の地を清掃、香華をたむけ、慰霊の行事を続けてきました。

そして、13年後の昭和33年3月、婦人会の皆さんが中心になって、区民と協議し、山内西地区全戸に寄付を呼びかけ、市からも補助金を受け、原爆犠牲者の慰霊碑を建立しました。この慰霊碑前では、毎年8月6日、原爆投下の日に遺族を招待し、山内地区社会福祉協議会の主催で慰霊の行事が開催されています。

昭和20年8月6日、原子爆弾が広島市に投下され、62周年を迎えました。原爆投下時、現在の山内小学校に急設された病棟に、多くの軍関係被爆者が運ばれ、山内地区の住民が一丸となって、被爆者の手当て・看護に従事しました。

そこには、被爆地ヒロシマを支えた「もう一つのヒロシマ」の姿が見えてきます。

山内原爆被害者の会の証言から当時を振り返り、平和について考えてみましょう。

3